

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第七十七卷「芸術、文化、言語、文学（一の七）」

三次元無形動的芸術の身体芸術（舞踊、バレエ、演劇、大衆演芸、舞
楽、巫女舞）

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第七十七巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、三次元無形動的芸術の身体芸術（舞踊、バレエ、演劇、大衆演芸、舞楽、巫女舞）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

浄瑠璃と原子核の構造？

第三編 三十歳～三十九歳

劇団公演出演者の経歴の英語訳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

編纂中。収録を待たれよ。

第二編 二十歳〜二十九歳

浄瑠璃と原子核の構造？

二〇〇八年十一月七日 起筆、擱筆、公開

ご無沙汰していて申し訳ないです。書きたいことは 100 も 200 も？ありますが……。

さて、最近興味深いことの一つは、元航空幕僚長が「日本が侵略国家というのは濡れ衣」との主張の論文を発表したという件で、早速全文を読んだのだけれど、その感想は後々書くとして、共感覚の話……。

そもそも日本人のアタマは、どういうものなのだろう。そういうことを、自分の共感覚と照らし合わせて考える今日この頃なのだが……。

僕にとっては、例えば簡単な数字で説明すると、「15+38」の答えは、「15+38=水色・緑青（ろくしやう）色+瑠璃色・萌黄（もえぎ）色=緑青色・瑠璃色=53」という共感覚による計算で出るのが、このスピードと言ったら、普通に「15+38=53」と計算するよりも

とんでもなく速い。さらに、なぜ「53」が素数であるかと言うと、まず、この「緑青色・瑠璃色」という色が自分の中では「山吹色」と美しく混ざることはないからである。「山吹色」と美しく混ざることがない、ということによって、「53」は、 $4 \cdot 7 \cdot 11 \cdot 14 \cdot 17 \cdot 21$ では割り切れない」ということが分かる。同様に、 5 や 6 ……などについても調べていく。

「調べていく」と書いたが、「調べる」という発想自体が自覚されていない。「美しく」と書いたけれど、「美」という発想もないかもしれない。少なくとも「beauty」の「美」という感じはない。「美」の反対は「醜」だが、例えば「桜」と「梅」、「山」と「海」、「京都」と「奈良」、「江戸」と「大坂」、そういった、どちらが良いでも悪いでもない二元的拮抗があると言うべきかもしれない。とにかく、頭の中や胸の中央あたりに、先のような色が光る。「考える」ということをやっているようでありながらも、「思惟（しい）」というよりは、「思惟（しゆい）」に近いという気がする。「止観」という言い方もできるかもしれない。共感覚が「降ってくる」というのが近いかもしれない。

などと偉そうに書いたが、この僕の計算方法、中学の頃までは「大雪のように降ってくる」方法で、存分に使っていたにもかかわらず、それ以降、この計算能力は急速に減退し、今では「春を迎えた庭の残雪」のようであり、いずれ全て融けるのかと思うと、寂しい思いがする。

それにしても、テレビで時々見るような、素数を延々と言い続け

る海外の自閉症の方々のような能力は、ついに自覚することなく、成人した今も残っていない僕としては、映画のレイマンのような人は、ただただ尊敬してしまふ。しかし、僕のように、計算能力（方法）だけが体から消えて、数字の色彩や音楽（材料）だけが残っている、あるいは計算能力以外の共感覚については、子どもの頃にあった共感覚の全てが今でも体に残っているというのは、不思議ではある。分類すれば20も30もある僕のあらゆる共感覚のうち、たった一つ、共感的計算能力だけを僕は失った。この原因は自分でも全く不明なのだが、よほどの文系人間なのだ！ということだけはよく分かった……。

ともかく、色彩でなくても、例えば音で言うと、僕にとって33は、口短調ないし雅楽の盤渉調の構成音で再構築できない数字だから、「2・4・6・9・10・11・12・14……では割り切れない」ということが、昔は簡単に分かった。「1」繰り上がって「……」といった学校教育的なやり方は、「色彩による演算」や「雅楽による演算」や「和歌による演算」など、自分の中にあまた存在する（子供のころにはもっと強く存在していた）計算法のうちの、「加減乗除の四則演算」という計算法が、たまたま世界に広がったものに過ぎない。などと、子どもながらに考えていた。

もちろん、今挙げた例は、ものすごく断片的でデジタル的で、数字という「記号」に対するものだが、他にも、これが例えば「文字に色が見える共感覚」に向かったとする。そうしたら、例えば「物」

という漢字は、僕には躑躅（ツツジ）色に見えるのだが、どうしてそうなるのか、なるべく根拠を示せと言われたなら、やはり日本の植物の色や雅楽の盤渉調の音階で構成できる漢字は数十個あつて、その一つが「物」で、そうやって覚えていくのだとしか答えようがない。文字は風景だとしか言いようがない。

あるいは、僕を持つ共感覚のうち、究極的にアナログなもので言くと、例えば、女性の性周期が、女性の顔や体の向きによって平調（ひやうぢやう）の音楽に聞こえたり、薄紅梅色に見えたりして外から分かるというのは、いわば「別解」もあつて、僕が好きな「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉（うづら）鳴くなり深草の里」という藤原俊成の和歌によっても、結果的には同じことが色彩や音として分かる。この和歌を愛唱していると、不思議とその身体の性質が分かってくる。どうしてそうなるのかと聞かれても、そうだからさうなのだとしか言いようがない。何が根拠かと言うより、それ自体が根拠だから、それ以上を問うことは同語反復にも思える。しかし、欧米ではこんな共感覚は存在しないはずであるから、何か別の感覚があるのだと思う。ともかく、この言葉の配列なり、色彩なり、音楽というのが、だいたい33と40くらい日本人女性の身体情報の捕捉に役立つとしか言いようがない。そもそも、書や大和絵や和歌や雅楽という日本の文化自体が、日本の男性にとってそういうものとして生まれたのだと思ひ込んでいた。思ひ込んでいたと言うよりは、和歌の発祥起源に至っては、まさに「歌垣」とか「かがい」とか言うものが、それそのものである。たぶん、中国のミャオ族あたり、

あるいは文字の色によって意味が変わる言語をしゃべるナシ族の男性あたりだと、こういう感覚がある男性はつい最近まで普通に暮らしていた、あるいは今も存在していると思われる。

とにかく、この感覚も、先の文字の躑躅色にしても、「考える」とか「思考する」という過程、つまり自分が「thinkしている」という過程を経っていない。その答えが分かる、ということは自分には分かっているが、他者に説明する術が分からない。そもそも、人間の「識」というものを「感覚」「知覚」「認知」などと合理的に分断したのは、西洋でさえ最近のことであって、そういう人体のとらえ方のほうが決して普遍的なものではないことを我々は忘れてはならないと思う。いずれにせよ、共感覚は完全に個人的・主観的で、そこに他者は存在しないのかと言えば、当の脳科学までが、「共感覚は人類皆が持っていた」と言いだしたのだから、言い換えれば、本来何の普遍性も持たないもの、一部の人間にしか当てはまらないもの、一部の男性や女性しか持ってこなかったもの、ある時代のある世代だけが持ってきたものは、共感覚ではないことだろうし、「自分の持つこの感覚は、自分だけのものではないはずだ」という実感は、正しいということなのだろう。それは確かに、共感覚の持つ大きな説得力だと思う。

ところで、今年のノーベル賞を受賞した四人の日本人。それぞれユニークな人生だなど、色々と調べて感心させられたのだが、個人

的に特に印象に残ったのは益川敏英氏だった。英語が大嫌い。ドイツ語は〇点。ノーベル賞授賞式が初の海外渡航。つまり、この人は物理学というものを、外国の土を踏みながら外国語で思惟したことがない。小学校の数学で〇点をとったことは僕もあるけれど……!?!? それはそれとして、僕は、物理学については門外漢のわりに、「日本語でしか解けない難問もあるんだろうな」などと何の根拠もなしに考えてはいたけれど、本当に外国語で考えない物理学もあるものなのだと感心させられた。言い換えれば、それは「物理学」「physics」でさえないかもしれない。もっとも、僕は「物理学」や「数学」という字を見るだけで眩暈がする人間で、三氏の学説をちよつと読んで、理解した気になって、早速諦めたが……。

岡潔という天才数学者が日本にいたけれども、この人は、「どうして世界中の数学者が寄って来なくても解けなかった問題が、あなた一人に解けたのか。」と聞かれて、「柿本人麻呂の和歌を見ていたら、数式が浮かんだ。」とか、「それは、日本人である私が日本語によって、日本人の情緒に従って解いたら解けたのだ。」と、驚くようなことを答えている。いったい柿本人麻呂の歌のどこに数式が書いてあるんだ、と思う。しかし、ふと考えてみると、驚くことでもない気がする。むしろ、共感覚者にとっては、過去にこういう堂々たる発言をした人がいたことは、一つの安堵感になり得る。ノーベル賞の湯川秀樹も、「莊子を読んでいたら、中間子理論を思い付いた。」とか、「もし自分が浄瑠璃と漢詩を愛していなかったとしたら、この理論を予言することは不可能だった。」と平然と答えている。

湯川秀樹によれば、日本人にとっては、原子核の緻密な構造は、日本語の語彙や文法によつて思惟すること、例えば日本人が日本人として浄瑠璃を改めて味わい、読み直すことによつて、より正しく把握されるという。岡潔も、今後の数学・科学の発展に必要なものは何か、と聞かれて、「正法眼蔵の思想だ」と答えた。周りは哑然である。もちろん、仏教書のどこにも数式なんて書いてはいない。和歌のどこにも原子の映像なんて映つてはいない。僕のような共感覚を持つ人から見ても、こういう人たちは頭の中がいったいどうなっているんだと思うが、僕はこういう人たちの言うことは本物だと思う。本当の天才とは、こういうものだ。どうしてそう思うかと言われると、これが実に答えづらいいけれど、本物だと思う。僕は、こういう日本人男性の力を信じる。

もちろん、こういう人たちの全てが、今の脳科学や心理学が対象としている共感覚者であるなどと言うつもりはないし、そう言う共感覚自体の扱いが広く薄っぺらになるから言わないけれど、せつかくなので、ここで少し、共感覚と重ねてみたいと思った。

いずれにせよ、どうして「15+38」水色・緑青（ろくしやう）色+瑠璃色・萌黄（もえぎ）色 \parallel 緑青色・瑠璃色 \parallel 53」という計算で答えが出るか、なるべく科学的に論拠を示しつつ答えなさいと人から聞かれたとしたら、僕も「そう言えば、この計算の感覚は、源氏物語の若菜上の巻を読んでいたときの感覚に似ているな。」などと、確かに岡潔のような答え方でしか答えようがないことに、今さらな

がら気付かされた。「53が素数なのはどうしてか。」と聞かれたら、「日本の雅楽の音階があまりにもそう聞こえてくるものだから、子ども心にそうと分かったのだ。」と答えるしかない。これはある意味、自分にとっては、これ以上論拠を示しようのない、完成された科学である。

湯川秀樹が「日本人・東洋人の自分が中間子理論を生み出したのは、要するにどういふことかと言うと、自分が浄瑠璃や漢詩を愛していなかったとしたら、こういうことは思い付かなかったということだ。」と言ったように、あるいは岡潔が「柿本人麻呂の歌に向かう心を持たずに数式を解けた自分というのは想像できない。」と言ったように、僕にとつても、自分が「夕されば」の短歌を愛する心を持たない男性であったなら、いったいどうなったことかと思うし、「53」という数字を岩絵具の顔料のように脳裏に描く心を持たなかったら、文字や数字がどんなにつまらない記号になっていたかと思う。その意味では、やはり共感覚に生きるといふのは、喜びなのだ改めて思う。もちろん、湯川秀樹や岡潔の能力には遠く及ばないが、この現実感・臨場感は大切にしたいと思う。

物理学にしても、ニュートン力学にアインシュタインが打ち勝つたその根本要因は、アインシュタインがニールス・ボーアに敗北した根本要因と、結局同一である。「神はサイコロを振るものだ」といふことである。物体が存在するというのは、すなわち、我々が「識」によつて知覚できる範囲内のものが、偶然にその物体という形をと

ってこの世に「縁起」しているということだ。そして今、「自発的対称性の破れ」に至っては、こういったことへの理解が必須なのだと思う。それはつまり、粒子の構造に向かって「実相観入」する、「純粹経験」するということであり、ひいては、物事の「うつろひ」に対して純粹に感動するということであると思う。

第三編 三十歳〜三十九歳

劇団公演出演者の経歴の英語訳

二〇一六年九月十二日 起筆

二〇一六年九月十七日 劇場・劇団主宰者および海外の著作権管理団体に初回提供

二〇一六年十月十九日 劇場・劇団主宰者および海外の著作権管理団体に追加提供

海外の著作権管理団体への英語による著作権使用料関連の届出・手続きの代行（代行依頼者・劇場・劇団主宰者）であるため、公開の可否を調査検討中